

2. 湯俣尾根・赤牛岳・高嵐尾根

昭和39年12月の記録 増瀬光弘

冬の赤牛岳を思い立ったのは、多分その前の年あたりからで、集中的に取り組んでいた黒部川上の廊下周辺の積雪期の目標の一つであり、その時の総仕上げ的な意味もあったと思う。同じ年の夏には、念願の上の廊下の溯行にも成功し、その時、同時に赤牛沢に入った時には、既に具体的な計画として、はっきりとしたものになっていたと記憶している。

深く切れ込んだ様な黒部川上ノ廊下の流れに山裾を洗われ、真向いの薬師岳と対になったようなのっぺりとした、何の変哲もない山容ではあるが、薬師岳から見るとっしりとした構えや、北アルプスの連山の真ただ中にあると言う地理的な魅力によって案外注目されて来た。

我々の計画でも、一番不安であったのは、やはり長大なコースに伴う、食糧など物的なもの、体力的なもの、また天候悪化のさいのエスケープの問題等、相当多く指適することができた。本来、この位の山になれば荷上げを行い念を入れるか、極地法などで行うのが一般的ではあるが、一面我々にとってはこういった状況をラッシュで突っ走ることのも一つの意義がある様に思われた。

食糧については、まずくとも、アルファ米など乾燥食品を使用し、昼食もレーション化するなど相当な圧縮化を図り、共同及個人装備は最小限度まで切りつめて軽量化を行った。予備日を含んで15日間の食糧装備であったが、意外と荷もかさばらず、周到な準備が成功したようだ。また、当時のメンバーの構成も逆ピラミット型となって四年生から3名、2名、1名、1名の順のまずは理想的なパーティーを作ることができた。

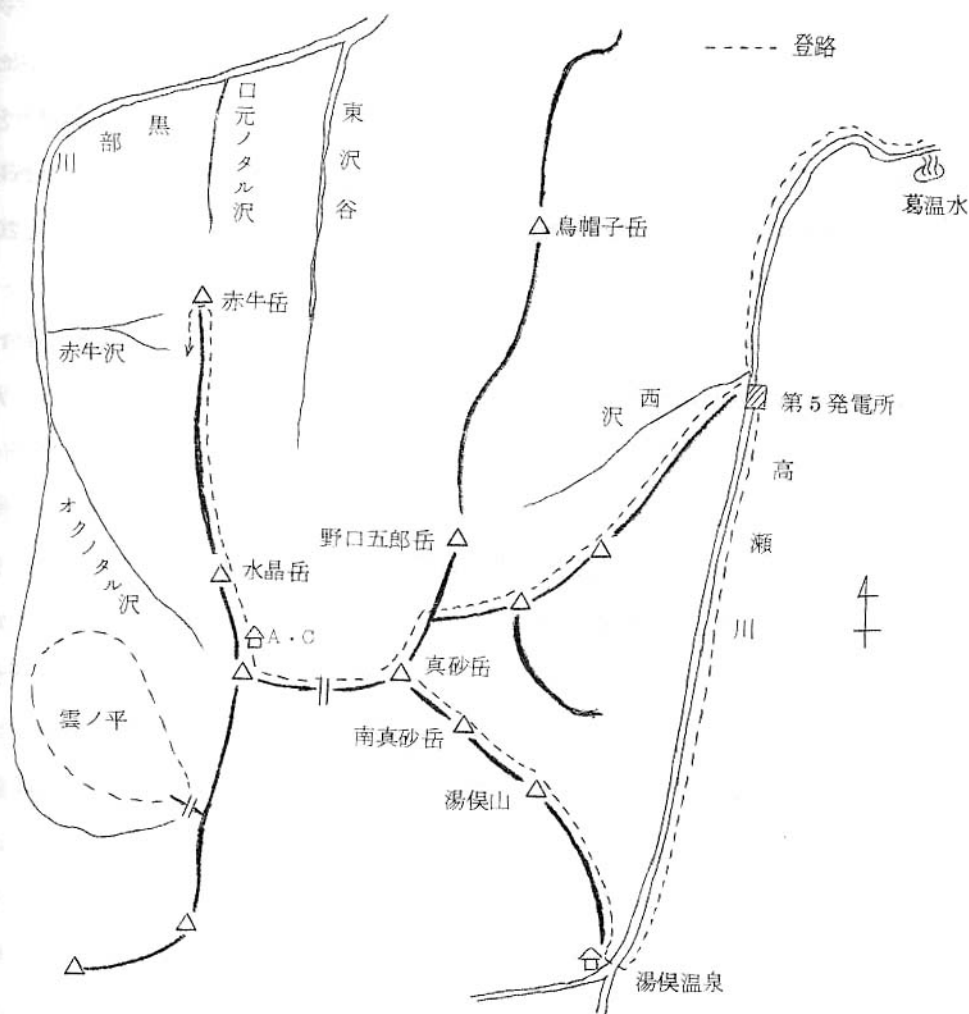
計画の概要及びルート概略図は次の通りである。

(メンバー)

C L 増瀬光弘、S L 鈴木孝尚、食糧 古谷精宏、装備 三浦嘉孝、
医療 杉本健二、気象 永森洋一、会計 和田德行

(行程)

- 12月20日 大町発 → 湯俣温泉
 12月21日 湯俣温泉発 → 湯俣山
 22日 湯俣山 → 南真砂岳
 23日 南真砂岳 → 水晶岳ヒナン小屋
 24日 停 滞
 25日 水晶岳A.C → 赤牛岳アタック
 26日 水晶岳A.C → 高嵐尾根
 27日 高嵐尾根 → 葛温泉



〔行動記録〕

12月19日 大阪発

12月20日 大町着、マイクロバスで七倉まで入るが予定していた軌道が使用できず、第五発電所までを考えると睡眠不足の体が増々重くなるような気がする。それでも第五発電所まではわりとスムーズに行けたが、それからは遅々として進まず重荷は体を締めつけてくる。薄暗くなり始めた頃湯俣へ着く。地面の露出した露天風呂の周りで設営する。

12月21日 晴 予定通り5時に起床したが出発は7時半頃となってしまった。尾根の取付は晴嵐荘の前を夏道通しに行く。クマザサの中をジグザグに急登が続くが、雪も少なく歩きづらい。やせた岩稜状の尾根を登り切った所で小さなコルに入った。この辺りは各種のペナントがあり、夏道も割りと顕著に表らわれているので楽である。しかし、尾根が広くなり始めた所から雪も深くなり、吹き溜りでは、わずか30mほどの高度差をつめるのに、20分もかかったりする。

小さな尾根が並行して続く所を、大体中央の尾根を、空身でラッセルを続けるが、今日中に湯俣山までは怪しくなってきた。暗くなり始めた頃唐松の大木の間に設営、その間に2名が、明朝のため1時間ほどラッセルをしに行く。

12月22日 晴 8時出発、今朝も1時間程出発が遅れる。全員で気合を入れ合ったが、心しなければならぬ。今日の出だしは、昨日のラッセルが効いて気分が良い位稼いだ。湯俣山の登りはゆるやかな尾根が途切れた所から左側にまわり込むようにトラバースをする。廻り切った所から、ブッシュの間を直登すると、ひょっこりピークに出た。素晴らしい快晴で、眺望も最高である。ここから南真砂岳とのコルに向ってゆるい下りとなり、尾根は広くなり、唐松の樹間を春山のような気分で歩く。コルからは、尾根の北側をまきようにして登る。ここらあたりでは、ペナントもなくなり、ルートを取り方に気を付ける。カンバがまばらに生えた所を尾根筋を目指して直登し、

やせた尾根から雪壁状になった所を登る。そこから又、山腹をまくようにして南真砂岳下の指導標のあるコルへ出た。ここは絶好のテント場である。2名で偵察を行い残りでテントを張る。今日でやっと遅れを取り戻した感じである。

今日も快晴で気分の良いことおびただしい。しかし天気もこれまでで、明日あたりからくずれそうである。ラジオの予報も悪くなりそうだと云っている。

12月23日 晴後曇 7時出発、快晴で風も弱く、南真砂岳まで一気に登る。今日の行程の赤牛岳の全貌が視界に飛び込んで来た。真砂岳までは、やせ尾根が続く、手強わそうである。バットレス状の基部のコルまで下り、偵察をしたが、張ってある針金も使いものにならず、そのまま右手の急な雪面をトラバースすることにした。登り気味にトラバースを続け、小さな支稜に取り付き主稜上へ出た。そこからは、雪の全然ないガレ場に行くが、アイゼンがいかに鉄の靴のようで歩きづらい。真砂岳は登らず、南側をトラバースし、やっと国境稜線へ出た。このあたりからガスが東沢谷より吹き上げて来はじめたが、休まず先に行く。風とガスは、バランスをくずし、視界をさえぎり難行する。やっと東沢乗越をこえ、最後の登りにかかるが、やせた尾根のルートファインディングに難渋したが、やっとの思いで水晶小屋跡に着いた。小屋跡の中を整備してテント設営をし、真暗になった頃落ち着くことができたが、ほとんど休みのない10時間の行動は相当こたえた。天気予報では荒れるとのこと。それでも早いうちにアタックは済ませたいものである。

12月24日 風雪 早朝より風とガスがひどく、待機していたが、7時に停滞と決定、まことにうまい具合に休みが取れた感で、よく食い、寝た。こういう停滞は楽しいものである。

12月25日 晴 起床4時、アタック隊はまだ寝ている。6時にテントを飛び出す。今日は素晴らしい天気になりそうである。アタックメンバーは4名

チーフはS Lの鈴木、6時半に出発した。アタックルートは困難な所もなくごく平易な縦走路ではあるが、広い尾根筋と距離の長さが何と云っても大きなポイントである。11時までには赤牛岳のピークを踏むように伝えてあるので、全速力を出していることであろう。我々テントキーパーも跡を追って水晶岳まで行く。途中は小さな雪壁あり、岩壁ありで仲々面白い。大体は夏道通しだが、雪でかくれている箇所など思い思いのルートを取つて行く。水晶岳からは、360度の眺望で、北アの中心に立っているようであり、槍ヶ岳から北鎌、それに薬師岳の圧倒的な山容は目をひく。

水晶岳より赤牛岳へ（アタック記録）

永 森 洋 一

全く最高の天気、目のさえるような青い空、周囲に白く逞しく輝く北アの連山、そして南ア、富士、八ヶ岳、上越の山々のシルエットが雲海のかなたに島のように浮んでいる。そのシルエットを追いながら、水晶の頂に腰を下ろしたとき、心はすべてを忘れ果て山に在ることの喜びに満ちあふれていた。

この合宿は全くついている。水晶小屋までは東沢垂越でブリザードに苦しめられたのみ、昨日の停滞はアタックに備えての休養を与えてくれ、そしてこの絶好のアタック日和、すべてが我々を歓迎してくれそうだ。そんな気分になりながら、昼食の「おやつ」をボリボリと口に入れていると下から大きな声が聞えてきた。「こらあー、早よ行きんかあー」新人の杉本と共に遅れて出発してきた増瀬の声だった。いけねえ、のんびりしすぎた。山でゆっくりできるのは一日の行動が終った時だけだ。

赤牛への下りは薬師側のクラストした急な斜面である。アイゼンの爪を立てて慎重に下降、右へトラバースして稜線に出る。東沢谷側は壁となって落ち込み大きな雪庇を形成していた。しばらく岩稜が続くがザイルは不用、雪庇に注意し、目印の赤旗を立てながら前進する。ところどころ雪を冠ったハイマツの上に行くが、どうもそんな所は安心して歩けない。ここぞと思った箇所に足を置いたとたん無情にも雪はくずれ去り、腰まで沈んでしまう。アイ

ゼンに密生した枝が絡みつき抜け出るのに一苦労だ。

2,742m の三角点付近からはただ広いガレと雪の尾根が赤牛まで続く。

ふり返ると水晶岳の黒々とした山容が高々と目に写る。ヤレヤレ帰りはあれを登るのかと思うとうんざりする。しかし締った雪とサブザックにアイゼンの足取りは軽く赤牛までピッチを上げる。

途中でテルモスを割ってしまった。我々の口に入らぬまま暖いコハク色の液体はガラスの破片と共に白い雪に色だけ残した。割れないテルモスというものもあるが保温性は悪い。両方兼ね備えたものが出来ないものかをつくづく感じさせる。

春山を思わせる強烈な太陽の光線を受け赤牛岳頂上へ立つ。別に感激はない。ただ目標を達成したということが何一つ聞えない静寂の中で心を落ち着かせてくれる。

昼食をしているうちに風が吹き出した。西の空が白くほんやりとして来たようだ。しかし今日は荒れることもないだろう。4.5枚写真を撮って女性的な赤牛岳を離れ黙々と帰途への足を進めた。

全く予定通りの行動にとまどいも覚えるが、目標を達成した気分も又一段である。しかし明日からは高嵐尾根である。全く未知の尾根なので、十分に注意したいものだ。

12月26日 晴 昨日に引続き快晴風は相変わらず黒部からの吹き上げがきびしいが、雪もよく締りアイゼンの音が心地よい。1日遅れで行動していた同志社のパーティーのフィックスザイルを使わせてもらい、東沢乗越へ下る。そこから通称裏銀座コースを夏道伝いに野口五郎岳の高嵐尾根側に出る。高嵐尾根の全貌が高瀬川に至るまで一望出来る。ここからは、だだっ広い雪のない尾根を下るが、強風とアイゼンの締りはこたえる。それでも2,488m点のジャンクションピークまでは、走るように下れたが、左へ折れ気味の北東尾根は湯俣側が切れ落ち、左手西沢側をまき気味に下って行く。

雪の状態は全く悪く、ハイマツ、カンバに足を取られ難行した。2,300mあたりから尾根筋には萎縮した木が大きなモンスターとなって行手をさえぎっている、一つ一つをたたき落さなければならない。やっと萎縮林を通り抜け下降、トラバースを続け小カン木の間で設営した。

天気予報は見通しの暗いことを言っている。明日は半日もてばと思う。

12月27日 晴時々曇 7時出発、朝から深い雪に難行する。胸まで入る雪に登りのように空身のラッセルが続く。ここらあたりは、地図上でもかない狭い尾根となり、ルートは一担広げた尾根上に出て又、西沢側の唐松の大木の間をトラバースするように進む。そのままトラバースを続けているうちに、急傾斜の岩場が表われ行きづまってしまった。どうやら支尾根に入った様子だ。見通しがきかず次々と偵察を行う。その結果支尾根を直登するよりも、岩場に沿って少し登り、急な雪面をトラバースする。ここらあたりは樹間ではあるが、西沢まで一気に落ち込んでおり、永森がずるずると1m程滑りはじめ、ひやんとする。そのままトラバースを続けながら主稜上へ出た。丸い感じのこの尾根を走るようにして下り、ペナントに導かれながら忠実に主稜上を進むと第五発電所の池が真下に見える頃には雪も少くなり、ワカンをはずし靴で下る。切り開きをジグザグに下って道水路の道にで、西沢の河原を吊橋まで行き、やっと一息ついた。天気も本格的な崩れを見せ始め、みぞれのようなものまで降り出したが、そのまま葛温泉まで一気に歩き通し、午後8時に到着した。

3. 槍ヶ岳・北鎌尾根 昭和42年12月20日—1月2日 藤原 聰

12月21日 快晴 初日から最高の天気である。去年は、七倉からすでにヤッケを着て、オーバーズボン、オーバージューズの完全装備で出発したのに。今年は全員スパッツのみで湯俣まで入る事ができた。全く全員汗だくの行進であった。テント場も地面が所々露出しており、冬用のテントを土の上に張るという全く冬山にあらざる光景である。